

教えてもらった話

～私たちが大切なことだと感じたこと～

VOL 11

ご自由にお持ち帰りください。



安心・快適そしてワクワク

株式会社 くるま生活

「日本でいちばん大切にしたい会社」

従業員約50名のうち、およそ七割が知的障害をもった方々で占められている。神奈川県川崎市のその会社は、多摩川が近くに流れる、静かな環境のなかにあります。この会社こそ、日本でいちばん大切にしたい会社の一つです。

昭和12年(1937)に設立された「日本理化学工業」は、主にダストレスチョーク(粉の飛ばないチョーク)を製造しており、50年ほど前から障害者の雇用を行っています。そもそものはじまりは、近くにある養護学校の先生の訪問でした。昭和34年(1959)のある日、一人の女性が、当時東京都大田区にあった日本理化学工業を訪ねてきたそうです。「私は養護学校の教諭をやっている者です。むずかしいことはわかっておりますが、今度卒業予定の子どもを、ぜひあなたの会社で採用していただけないでしょうか。大きな会社で障害者雇用の枠を設けているところもあると聞いていますが、ぜひこちらにお願いしたいのです」障害をもつ二人の少女を、採用してほしいとの依頼でした。

社長である大山泰弘さん(当時は専務)は悩みに悩んだとい

います。その子たちを雇うのであれば、その一生を幸せにしてあげないといけない。しかし果たして今のこの会社に、それだけのことができるかどうか……。そう考えると自信がなかったのです。結局、「お気持ちはわかりますが、うちでは無理です。申し訳ございませんが……」しかしその先生はあきらめず、またやって来ます。また断ります。またやって来ます。それでも断ります。

三回目の訪問のとき、大山さんを悩ませ、苦しませていることに、その先生も耐えられなくなったのでしょうか、ついにあきらめたそうです。しかしそのとき、「せめてお願いを一つだけ」ということで、こんな申し出をしたそうです。「大山さん、もう採用してくれとはお願いしません。でも、就職が無理なら、せめてあの子たちに働く体験だけでもさせてくれませんか？そうでないとこの子たちは、働く喜び、働く幸せを知らないまま施設で死ぬまで暮らすことになってしまいます。私たち健常者よりは、平均的にはるかに寿命が短いんです」頭を地面にこすりつけるようお願いしている先生の姿に、大山さんは心を打たれました。「一週間だけ」ということで、障害をもつ二人の少女

に就業体験をさせてあげることになったのです。

「私たちが面倒をみますから」就業体験の話が決まると、喜んだのは子どもたちだけではありません。先生方はもちろん、ご父兄たちまでたいそう喜んだそうです。会社は午前 8 時から午後 5 時まで。しかし、その子たちは雨の降る日も風の強い日も、毎日朝の 7 時に玄関に来ていたそうです。お父さん、お母さん、さらには心配して先生までいっしょに送ってきたといいます。親御さんたちは夕方 3 時くらいになると「倒れていないか」「何か迷惑をかけていないか」と、遠くから見守っていたそうです。

そうして一週間が過ぎ、就業体験が終わろうとしている前日のことです。「お話があります」と、十数人の社員全員が大山さんを取り囲みました。「あの子たち、明日で就業体験が終わってしまいます。どうか、大山さん、来年の 4 月 1 日から、あの子たちを正規の社員として採用してあげてください。あの二人の少女を、これっきりにするのではなくて、正社員として採用してください。もし、あの子たちにできないことがあるなら、私たちがみんなでカバーします。だから、どうか採用してあげ

てください」これが私たちみんなの願い、つまり、総意だと言います。社員みんなの心を動かすほど、その子たちは朝から終業時間まで、何しろ一生懸命働いていたのです。

仕事は簡単なラベル貼りでしたが、10時の休み時間、お昼休み、3時の休み時間にも、仕事に没頭して、手を休めようとしません。毎日背中を叩いて、「もう、お昼休みだよ」「もう今日は終わりだよ」と言われるまで一心不乱だったそうです。ほんとうに幸せそうな顔をして、一生懸命仕事をしていたそうです。社員みんなの心に応えて、大山さんは少女たちを正社員として採用することにしました。一人だけ採用というのはかわいそうだし、何よりも職場で一人ぼっちになってしまいやすいのではないか、二人ならお互い助け合えるだろうということで、とりあえず二人に働いてもらうことになりました。

それ以来、障害者を少しずつ採用するようになっていきましたが、大山さんには、一つだけわからないことがありました。どう考えても、会社で毎日働くよりも施設でゆっくりのんびり暮らしたほうが幸せなのではないかと思えたのです。なかなか言うことを聞いてくれず、ミスをしたときなどに「施設に帰す

よ」と言うと、泣きながらいやがる障害者の気持ちが、はじめはわからなかったのです。

そんなとき、ある法事の席で一緒になった禅寺のお坊さんにその疑問を尋ねてみたそうです。するとお坊さんは「そんなことは当たり前でしょう。幸福とは、①人に愛されること、②人にほめられること、③人の役に立つこと、④人に必要とされることです。そのうちの②人にほめられること、③人の役に立つこと、そして④人に必要とされることは、施設では得られないでしょう。この三つの幸福は、働くことによって得られるのです」と教えてくれたそうです。「その4つの幸せのなかの3つは、働くことを通じて実現できる幸せなんです。だから、どんな障害者の方でも、働きたいという気持ちがあるんですよ。施設のなかでのんびり楽しく、自宅でのんびり楽しく、テレビだけ見るのが幸せではないんです。真の幸せは働くことなんです」普通に働いてきた大山さんにとって、それは目からウロコが落ちるような考え方でした。

これは、働いている多くの人たちも忘れてのことかもしれません。それを障害者の方によって教えられたのです。この言

葉によって、大山さんは「人間にとって“生きる”とは、必要とされて働き、それによって自分で稼いで自立することなんだ」ということに気づいたそうです。「それなら、そういう場を提供することこそ、会社にできることなのではないか。企業の存在価値であり社会的使命なのではないか」それをきっかけに、以来 50 年間、日本理化学工業は積極的に障害者を雇用し続けることになったのです。

出典元：(日本でいちばん大切にしたい会社 坂本光司)

★プールを歩いて渡った少女★

広島的女子高校生のA子ちゃんは生まれた後の小児まひが原因で足が悪くて、平らなところでもドタンバタンと大きな音をたてて歩きます。この高校では毎年7月になると、プールの解禁日にあわせて、クラス対抗リレー大会が開かれます。一クラスから男女二人ずつ四人の選手をだして、一人が二十五メートル、全部で百メートル泳いで競走します。この高校は生徒の自主性を非常に尊重し、生徒だけで自由にやるという水泳大会で、その年も、各クラスで選手を決めることになりました。

A子ちゃんのクラスでは男二人、女一人は決まったのですが、残る女一人が決まらなかった。そこで、早く帰りたくてしょうがないそのクラスのいじめっ子が「A子はこの三年間体育祭にも出てないし、水泳大会にもでていない。何にもこのクラスのことをしていないじゃないか。三年の最後なんだから、A子に泳いでもらったらいんじゃないか」と意地の悪いことをいいました。A子ちゃんは何だか味が方してくれるだろうと思いましたが、女の子が言えば自分が泳がなければならないし、男子が言えばいじめっ子のグループからいじめられることになり、だれも味が方してくれませんでした。

結局そのまま泳げないA子ちゃんが選手に決まりました。家に帰りA子ちゃんは、お母さんに泣いて相談しました。ところが、いつもはやさしいお母さんですがこの日ばかりは違いました。「お前は、来年大学に行かず就職するって言ってるけれど、課長さんとか係長さんからお前ができない仕事を言われたら、今度はお母さんが『うちの子にこんな仕事をさせないで下さい』と言いにいくの？たまには、『いいわ、私、泳いでやる。言っとくけど、うちのクラスは全校でビリよ』と、三年間で一回くら

い言い返してきたらどうなの。」とものすごく怒ります。

A 子ちゃんは泣きながら二十五メートルを歩く決心をし、そのことをお母さんに告げようとしてびっくりしました。仏間でお母さんが髪を振り乱し、「A 子を強い子にしてください」と必死に仏壇に向かって祈っておられた。

水泳大会の日、水中を歩く A 子ちゃんを見て、まわりから、わあわあと奇声や笑い声が聞こえてきます。彼女がやっとプールの中ほどまで進んだその時でした。一人の男の人が背広を着たままプールに飛び込み A 子ちゃんの横を一緒に歩き始めた。それは、この高校の校長先生だったのです。

「何分かかってもいい。先生と一緒に歩いてあげるから、ゴールまで歩きなさい。はずかしいことないじゃないか。自分の足で歩きなさい」と励まされた。

一瞬にして、奇声や笑い声は消え、みんなが声をだして彼女を応援しはじめた。長い時間をかけて彼女が二十五メートルを歩き終わったとき、友達も先生もそして、あのいじめっ子グループもみんな泣いていました。

出典元：(読売新聞 窓)

■愛情を注ぐ

先日、友人と食事に行った時です。友人が「料理で一番大切なものはなんだと思う」と聞くので「材料だと思う」と答えたのですが、友人は「もっと大切なものがあるんだよ」と面白い話を紹介してくれました。

ある男性は妻が料理を作るときに、いつも加えている調味料が気になって仕方ありませんでした。妻の料理はとても美味しかったのですが、その理由が「この調味料だ」といつも妻が言うからです。妻は小さな白い小瓶に入った調味料を料理に振りかけるのですが、何度聞いてもそれが何かは教えてくれません。「母からもらった大切な調味料だから触らないでね」と言って見せてもらうこともできませんでした。

ある日、一人で家にいるときに台所に置いてあるこの調味料が気になりました。妻に悪いとは思ったのですが誘惑に負けてこの小瓶を棚から取り出して、そっと振ってみました。しかし、何も出てきませんでした。

不思議に思って小瓶についていた小さな蓋を開けると、中に

小さく丸めた紙が入っていました。破らないように注意深く広げると、そこには「あなたの持っている愛情を作るすべての料理に振りかけなさい」と妻のお母さんの字で書かれていました。

男性はなぜ、妻の料理が美味しいのか初めてわかりました。どんな高級レストランの料理も自分のために気持ちを込めて作ってくれた料理にはかなわないと思いました。毎日、料理を作ってくれる奥さんに感謝したいと思いました。

たった一言で

鹿児島県の池田小学校の先生からクラス全員に「たった一言で」に続く言葉を次々に書いてもらい、詩の形式にまとめたものが綴られていました。担任の先生は、こうっています。「たった一言ですが、されど一言。その一言は、ひょっとすると人生をも左右する大きな力を持っているかもしれません」

私は、これを読んで、その昔、入院生活をしていたときのこと思い出しました。毎日1回、担当のお医者さんが必ず病室に様子を見に来てくれました。その都度「再発するかもしれません」「治っても、ずっと通院が必要です」と繰り返し言われたの

です。

事実を伝える義務があることや、ちょっと大袈裟に言って油断させないためであることも理解できます。ありがたいことなのですが、心のなかは真っ暗になっていたのです。その言葉が夜中に蘇り、眠れない夜もありました。

そんなときのことです。午前10時「おはようございます」掃除のおばちゃんが明るい声で現れます。「ああ、今日は顔色いいわねえ」この一言で目の前がパッと明るくなったのです。たった一言ですが、何よりの薬になりました。」以来、そのおばちゃんのことを影の名医と呼んでいます。

池田小学校のみんなで作った詩です。

「たった一言で」

池田小学校・3年2組

たった一言で うれしくなる

たった一言で かなしくなる

たった一言で 苦しくなる

たった一言で 楽しくなる

たった一言で 泣きたくなる

たった一言で 「ありがとう」と言いたくなる
たった一言で やる気が出る
たった一言で あたたかくなる
たった一言で さみしくなる
たった一言で わらえる
たった一言で 頭にくる
たった一言で はずかしくなる
たった一言で 落ち込む
たった一言で いやになる
たった一言で おこりたくなる
たった一言で こわくなくなる
たった一言で 元気になる
たった一言で …

■仲間を大切にする

先日、三鷹青年会議所の例会で自衛隊に1泊2日の研修に行ってきました。どんなことをやるのか楽しみにしていたのですが、さすがに体力的にも精神的にも厳しい2日間でした。

1日目は敬礼や行進の訓練をした後に、数人で協力して重量物を撤去する作業を行いました。仲間との呼吸が大切な作業でした。自衛隊では時間は絶対に厳守です。誰かが遅れたために撤退が遅れれば、爆弾が飛んできて全員の死亡も考えられるからです。訓練でも時間厳守で誰かが1人でも集合に遅れたら、連帯責任で1秒の遅れに対して腕立て伏せ10回と言われていました。

1日目の最後に教官に「明日の朝、8時に装備を整えてグラウンドに集合、絶対に遅れるな」と言われて解散しました。遅れると大変なことになるのでみんなでお互いに起こそうと決めて眠りました。

次の朝、予定よりも2時間早い6時に「5分以内に装備を整えてグラウンドに集合」という放送がかかりました。慌てて集合したのですが、最後の1人が来たのは7分後でした。

「2分の遅れだから腕立て1200回だな」と教官が言うと腕立て伏せが始まりましたが、次々とダウンしていきました。教官は「一番、悪いやつは誰だと思う？」と質問しました。当然、一番遅れて来た人だと思ったのですが、教

官は「一番、悪いやつは一番初めにグランドに来たやつだ。最初に来れた人は遅れている仲間を助けることができたはずだ。どうして仲間を助けないんだ」と怒りました。

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

ホンの少しですが、この冊子を手にとられたすべての人が心豊かになることを祈念しております。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。

私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。

①人に存在を認められる事

②素敵な想いが実現すること事

私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように
仕事させていただきます。(*^^)v

〒720-0961

広島県福山市明神町2丁目9-25

株式会社くるま生活

代表取締役社長 井上康一

TEL 084-943-7123

info@kurumaseikatsu.co.jp

第11回作成 2015年3月19日

コピー大歓迎。何部でもお届けします。